

## 第二十一章 日中に橋をかける

佐藤前首相が政治生命をかけて実現した沖繩返還は、むろん多くの限定つきではあったが、日本の外交が、それまでの米国追随型外交から自主外交へと転換する契機となった。米国は自身が対中緩和策をとったが、日中国交回復がそれほど早く展開するとは、予想も期待もしていなかった。しかし、総裁公選において田中角栄が打ち出した主要な対外政策は、「日中国交正常化」であり、田中は、そのスローガンの「決断と実行」にふさわしく、組閣当日の昭和四十七年（一九七二年）七月七日、ただちに「中華人民共和国との国交正常化を急ぎ、激動する世界情勢の中にあつて、平和外交を強力に推進する」という首相談話を発表した。

中国側の反応も素早いもので、一日おいた九日には、周恩来首相が「日中国交正常化の早期実現に努力したい」と田中首相談話を歓迎する」と声明した。すでに、総裁公選直前の七月三日に、中日備忘録貿易弁事処駐東京連絡処の新しい首席代表に知日派の肖向前を送りこんでいたのに加え、十一日には、同処前首席代表の孫平化（中日友好協会副秘書長）を上海舞劇団の団長という名目で派遣してきた。また孫平化の来日後間もなく、中国外交部の陳抗アジア司日本処長が来日し、孫平化に周首相の次のような指示を伝えたとされる。

「私が田中内閣が中日国交正常化の実現につとめているのは歓迎に値すると言ったのは、毛主席が積極的

な態度をとるべきだと言ったからである。……話がまとまるにしてもまとまらないにしても今はこのあいだ。しっかりと情報をつかまねばならない。……孫平化は万丈の樓閣を平地に建て、尙向前はひきつづき前進しなければならぬ。

野党もまた、機敏な反応を示した。十日には、社会党の成田知己委員長が「田中内閣が『復交三原則』を認めるなら支援する」と述べ、十二日には、民社党が「議題を明らかにして取り組めば協力する」と声明し、公明党も「田中首相が日中打開への決断さえ持てば協力は惜しまない」との見解を示した。

自民党は、十三日、党内の意見調整を急ぐため、党中国問題調査会を総裁直属の日中国交正常化協議会（会長小坂善太郎）に改組して、体制を整えた。

しかし当の大平外相は相変わらず持ち前の慎重な態度を崩さず、十四日の記者会見では次のように語った。「外務省の中には、朝から晩までこの問題ばかりを考えている連中があるので、私はいまその話をきいて消化中です。それと、党のコンセンサスをつくること、この二つが大切です。できないことをできると言うて、やってできないかつたら大変だ。事が大きいのだからゆっくりやりましょう」。

大平外相のこうした構えには、それなりの理由があった。その第一は、これまで日中関係者や親中派議員から伝えられてきている中国側の非公式な感触がどこまで「本音」なのかもう一つ詰め切れないこと、第二は、総裁選の結果「国交正常化」という大勢は明らかにしたものの、党内に多くの親台論者や慎重論者が存在する中でコンセンサスを固めていくのがむずかしいこと、第三は、ニクソン訪中があったにせよ、いまだ中国との間に国交が成立していない米国が日中国交正常化に対してどのような反応を示すか明らかでないこと などの点である。

一年前、佐藤政権のもとにあつて国連における中国代表権問題の逆重要事項指定を支持した日本の外務省

は、政権が代わり、外務大臣が代わったからと言って、そう簡単にこれまでの考え方を一掃できるわけがない。大平外相は熟慮を重ねたのち、担当官に対し、特命事項として、大臣自身に直接に進行状況を報告するよう指示すると同時に、外交的にはこれまた異例の措置ではあったが、日本にきている孫平化、肖向前の両代表と直接会って、中国側のナマの感触をさぐることにした。

この間にも、日中復交ムードはますます高まった。十六日には、中国の周首相が北京訪問中の佐々木更三社会党前委員長らと会見、「田中首相の北京訪問を歓迎する」と語り、これを受けて、田中首相は、十九日、就任後初の外人記者団との会見で、日中国交正常化は「機が熟しているの一語につきる」と意欲のさかんなところを見せた。

大平外相もその前日の十八日に、中日備忘録貿易弁事処駐東京連絡処など公式ルートを通じて日中間の接触をはかる考えを明らかにしたあと、藤山愛一郎日中国交回復議員連盟会長が「孫・肖両氏歓迎会」の名目で二十日、ホテル・ニュージャパンで開いたパーティーに出席した。藤山会長の紹介で孫・肖両代表と握手を交わしたさい、大平外相は小さな声で、「また、そのうちに会いましょう」とささやき、孫団長は、「日中国交正常化は単にムードではなく、花開き、実を結ぶものとなることを期待します」と言ったという。

翌二十一日、孫団長の率いる上海舞劇団が八月十六日に日航、全日空両航空会社の特別機で上海に直行して帰国することが決まったが、これは、実質的には田中、大平の北京訪問の予行演習とも言うべきものであった。孫団長は、このことの意味を知らされておらず、直行便とはせいたくだと本国に反対したが、帰国後、周首相が孫報告を見て、「ちがう、きわめて必要だ。これが政治だ」とコメントしていたことを知らされた。二十二日には、大平と孫・肖との会談が実現したが、孫平化によれば、大平はこの日、「私と田中首相は一心同体の盟友であり、首相は外交事務を責任をもって処理する全権を私に委託している。現在日本政府首脳が訪中し、国交正常化を解決する機は完全に熟している」と述べたという。

この間にあって、大平外相が最大の相談相手に選んだのは古井喜実衆議院議員であった。古井は内務官僚時代からの大平の知己で、長い間、日中の橋渡しの役割を果たし、中国側が最も信頼を寄せてきた人物である。

二人は築地の「栄家」などで何回にもわたり長時間の会談を重ねた。この会談で検討された問題点の第一は、日米安保条約の存続を前提として中国が果たして国交正常化に応ずるかどうかが、第二は、国交正常化後も台湾との間で経済的、文化的関係を維持していくことができるかどうか、第三は、日華平和条約がその締結時にさかのぼって無効とされるのではなく、将来に向かつてのみ効力を失うとする措置に中国側が同意するか、第四は、膨大な額にのぼると思われる対日賠償要求を中国側が放棄してくれるかどうか などの諸点であった。

大平外相は、これらの問題点を踏まえ、法眼晋作事務次官を委員長とする外務省中国問題対策協議会を設置して、正常化交渉のさいの日本側の基本姿勢の検討を命じた。対策協議会がその出発点としてまず明らかにしたのは、「日中国交正常化が実現した暁には、台湾との外交関係は持続しえなくなる」という見解であった。いまから振り返ればごく当然のこの問題も、台湾との外交関係をなんとか維持しながら、北京との正常化をはかるうと模索しつづけてきた外務当局にとっては、相当な難問であった。

大平外相は、八月二日に開かれたこの対策協議会の初会合で、「国家百年の計をも決めることになる問題なのだから、どんな見落としがあってもいけない。また事は急を要するのだから、夏休みを返上してほしい」と督促した。

翌三日、外務省は政務次官会議の席上で、日中国交正常化交渉を進めるにあたっての政府の基本的見解を明らかにした。その内容は、日中国交正常化の第一の目的は、日中間の不自然な関係を解消し、わが国の平和外交をさらに強化することにある。第二の目的は、正常化によってアジアひいては世界の平和と安定に

寄与することである。したがって正常化は第三者に向けられたものではない。中華人民共和国が示した

「復交三原則」については、基本的認識としては、日本政府も十分理解できるとの立場であり、具体的には日中間の話し合いによって合意点を見出したい。日中間の外交関係が樹立されれば、当然の帰結として中

華民国政府とわが国との外交関係は持続しえなくなる。その場合、中華民国とわが国との貿易、経済関係をはじめ各種の実務的關係は現実的に解決されることになろう。というものであった。

政府はここにはじめて、日台間の外交関係が消滅する見通しを明らかにしたのである。

大平外相は、この政府見解を携えて、自民党日中国交正常化協議会の常任委員会に出席した。この協議会は、正常化推進論者、慎重論者の双方から衆議院議員二百十二名、参議院議員九十九名、元議員五名、合計三百十六名が参加するという大所帯で、八月二日以来連日のように激論がつついていた。大平外相がこの政府見解の内容を説明すると、台湾擁護派は、「台湾問題はきわめて重大な問題である。軽々しく、外交関係の断絶というような結論を出すべきではない」、「中国ばかりが原則を持ち出しわが方に原則がないのはおかしい」などと激しく大平外相にかみついた。

これに対して大平外相は、長時間にわたってねばり強く基本方針の内容を説明し、「外交はもろろん国益を守るために対等にやるべきで、日本はそういう大原則をもってやればいい」とガンとして譲らなかつた。こういう態度に対して、親台派の中に反発が強まる一方、中堅・若手議員の間からは次第に「大平さんを見直した。あの人はハラをすえてやっている」との声があがるようになった。

とはいえ、中国側が最終的にはどのような条件で手を打つかについては、大平外相はまだ定かにつかんでいないわけではなかつた。そこへ、七月二十五日から訪中して周首相と三回にわたり十時間に及ぶ会談を行ってきた公明党の竹入委員長が帰国して中国側の意向を伝えた。

竹入は、この時の模様を次のように記している。

「……八月三日夜半に帰国した私は、翌日、首相官邸に首相と大平さんを訪ね、周總理が示した日中国交正常化の共同声明中国側草案を渡した。大平さんは、私とは対照的な、あの目を一段と細め笑みを浮かべて、私のメモをポケットに入れた。後刻、大平さんは私に『竹入さん、あとは首相の決断だけだよ。決断したら私は外務大臣として万難を排してやる。奮つよ』と明言した」。

竹入メモは、日中国交正常化のための田中訪中にさいし、日中両国は共同声明または共同宣言を出した。日米安保条約の存在は、正常化の支障にならない。佐藤・ニクソン会談における『台湾条項』も障害にはならない。尖閣列島の領土問題も妨げにはならないと思う。日本の侵略に対する賠償請求権は、将来の日中友好を考えて放棄するつもりである。日中間の平和条約の締結問題については、日本が台湾と日華条約を結んでいるといういきさつもあり、新しい『平和友好条約』といったものにしたらどうか。など八項目にわたる詳細なものであった。

こうした流れの中で、自民党の日中国交正常化協議会は、八月十日の総会で、田中首相の訪中を決議し、大平外相は、翌十一日、孫・肖両代表との二回目の正式会談で、『いずれ訪中したい』という首相の意向を伝えた。この席で外相は、中国側に田中首相との会談を斡旋することを約束した。十五日、帝国ホテルで行われた田中・二階堂・孫・肖四者会談では、中国側が田中首相の早期訪中を要請したのに対し、田中は「北京の気候はいつが一番いいのかわからない」と尋ね、「九月末から十月初めにかけて」との答えがあつて、事実上、その時期をメドにした田中訪中が固まった。

大平外相は、田中と孫・肖両代表との会談が円満に終わり、田中自身が訪中の意向を示唆したことをもつて、自民党内の調整および米国との意見調整の二つを除いて田中訪中の手筈はほぼ整ったと判断し、田中首相の最終決断を求めた。

外相が首相に「中国側の真意はほぼわかった。あとはやるだけだ。君もいままでやりたいことはやってき

たと思う。ここはお互いハラをくくってやるうじやないか」と話しかけると、田中は即座に、「わかった。どうせ人は一生一度しか生きられないんだ。それじゃ行くか」と答え、「具体的な交渉は君にまかせる。党内のことは、俺が責任をもつてやる」とつけ加えたという。

こうして日中国交正常化のための手筈は一応着々と進んだように見えたが、大平外相としては、さらに北京のハラ、そしてワシントン、台北の動向をさぐらなければならなかった。とりわけ大平は、中国が長い間日米安保条約に反対してきた経緯から、交渉の場でこの問題についてどのような出方を示すか、安保条約の当事国である米国が日中交渉にどのような関心を示しているかを、十二分に打診しておくべきだと考えた。

米国に対しては、田中政権の成立後間もなく、日本側から日米首脳会談の申し入れが行われ、昭和四十七年七月二十四日には、九月初めにハワイのホノルルで開かれることに合意を見た旨の発表がなされていた。この時点ではまだ、アメリカ側は、日中国交正常化はそれほど早く進むとは見ておらず、首脳会談の議題は、日米貿易不均衡是正の問題が中心となるべきだと考えていた。そして、七月下旬の箱根における日米通商会議ではもっぱらこの問題が論ぜられたが、アメリカは結果に不満で、来るべき日米首脳会談には田中首相が何らかの「土産」を持参することが期待されていた。

八月十八日には、ベトナムと平和交渉のためパリからサイゴンに回ったキッシンジャー米大統領補佐官が、帰途、日本に立ち寄り、田中首相、大平外相と懇談したが、日本側の日中国交正常化についての説明に対しては、アメリカ側の立場を一切明らかにしなかった。

この頃大平は、秘書官に「北京に行くには、まっすぐ行くのではなく、ハワイを経由して行かねばならない」と語っていたというが、これは結局ニクソン米大統領と直接会談し、その了解のもとに、日中国交正常化を達成したい、という考えを表していたと見るべきであろう。

キッシンジャー補佐官が離日した翌二十日、大平外相は首相と会って、田中首相の訪中に先立って、九月に大型の自民党代表団を北京へ送ること、台湾には政府特使を派遣することを決めた。特使の人選は難航したが、八月二十二日、首相は、空席となつてゐる党副総裁に椎名悦三郎元外相を指名し、同時に台湾への特使を依頼、椎名もこれを受諾した。

台湾がもっとも関心を持ち、しかも不愉快に思つてゐる問題について事情説明に行くのだから、この特使は気の重い、愉快ならざる役回りであることは言うまでもない。椎名訪台が決まつて間もなくのある夜、六本木の料亭で椎名・大平会談が行われた。この席で椎名は、「日中国交正常化は結構だが、こつこつふつに、こんど北京と正常化するから、台北とは絶縁するといふやり方はちよつとおかしいんじゃないか。ある日突然、もうお前さんの方とは付合はぬといふようなやり方でなく、正常化をする方法はないか」と、台湾に対し含みのある釈明ができるよつな説明を求めた。これに対して大平は、「片方を選択すれば片方は断念せざるをえません。朝鮮半島でもドイツでもベトナムでも、分裂国家との付合ははそれがありません」と答え、話し合ひは噛み合わないままで終わった。

波長の合わなかつた理由は明らかである。椎名は、「台湾に特使で行くのだから、外務大臣から、将来、日本としては台湾をどう扱つていくか、胸の内を明かしてくれればいい。何も知らされずに台湾に行かせるとは何ごとか」といふことになるだろう。これに対して大平としては、「日中交渉のポイントが台湾の扱いであることは明白であり、台湾との実務的關係をいかにして守るかをいま何が言えば、日中正常化はできなくなつてしまふ。だから、そのへんは察してほしい」といふものであつたらう。岸内閣から池田内閣へ移行するさい、椎名官房長官から大平官房長官へ、そして池田内閣では大平外相から椎名外相へとパトントンタッチしたといふ個人的なつながりもあつて、大平、椎名の間柄はそれまでは比較的円滑だったが、この会合は両者の關係に微妙な力ゲを落とすことになつた。



この間、自民党内では、日中国交正常化協議会を舞台に、国交正常化推進論者と台湾擁護論者との間で、激しいやりとりがつづいていたが、そうこうするうちに、ハワイ会談の日程は迫り、八月三十一日、田中首相は大平外相を伴って羽田を出発した。会場は、オアフ島北側のクイリマ・ホテル、米側の出席者はニクソン大統領とロジャー・ス國務長官である。ここでは、予想どおり米側から日米貿易不均衡是正問題が持ち出され、日本側からは日中国交正常化問題が持ち出された。

会談後に行われた九月一日の共同声明では、田中首相の訪中については、「アジアにおける緊張緩和の傾向の促進に資することになることをともに希望した」と謳われ、貿易不均衡問題については、「日本政府は合理的な期間内に不均衡をより妥当な規模に是正する意図であることを指摘した」と表明された。また共同声明とは別に、不均衡是正のため日本側が緊急輸入約七億一千万ドルを行うことが発表されて、米側は満足の意向を示した。

この会談は、日中国交正常化についても、ほぼ満足すべき成果をもたらしたと言える。というのは、日本側が持ち出したこの問題について日米間での議論は全く行われなかったが、米側は、日本が米国に先行する形での対中正常化に否定的な反応を示さなかったからである。同時にハワイ会談で打ち出された「日米安保堅持」の方針に対して中国側が何の反応も示さず、クレームをつけない見通しがはつきりした。

「まず、ハワイはうまくいった」との感慨が外相の胸をよぎった。少なくとも北京行きの片道切符だけは手に入れたのである。

日米首脳会談のあとを受けて、自民党の日中国交正常化協議会は、持越しになっていた基本方針を確立するため、九月八日、党本部で総会を開き、政府が日中復交交渉にのぞむうえで「日中国交正常化基本方針」を決めた。

この方針は、まず、「政府はわが国と中華民國との深い関係にかんがみ、従来の関係が継続されるよう十分配慮のうえ交渉すべきである」としたのち、正常化に当たっては、国連憲章、バンドン十原則に基づいて行われるべきである、相互に異なる体制を尊重し、内政に干渉せず、友好国との関係を尊重する、相互に武力および武力による脅迫は行使しない、相互に平等な経済的文化的交流の増進につとめ、差別的取扱いをしない、相互にアジアの平和と繁栄のために協力するの抽象的な五原則をあげたにとどまった。台湾擁護派からはこれでも異論が出されたが、小坂善太郎会長らは、明確な解釈を示さぬまま、とりあえず、この基本方針によって、党内の合意ができたとしたとして、九月十四日、代表団一行が、一週間の旅程で北京に旅立った。

椎名特使の一行も、十八、十九の両日、台湾政府を訪問した。案の定、台北空港には学生のデモ隊が迎え、市内では車にタマゴが投げつけられ、蔣介石總統は会談を拒否して、歓迎せずの意向を示したが、椎名特使は台湾政府首脳と会って、「日中正常化交渉は自民党の党議に基づいて行われるはずである。これは台湾問題について外交関係も含めて従来のあらゆる関係を維持しようということだ」と説明した。これは日中両国政府の考えている日中正常化路線から台湾よりに大きく逸脱したものだだったが、台湾側の冷やかな反応は変わらなかった。椎名特使は惘然たる表情で帰国した。

一方、北京では、周恩来首相と小坂代表団との間に折衝が行われていたが、周首相は、台湾での椎名発言を聞いて大いに腹を立てた。周恩来首相ら中国首脳がそれでも事をこわさなかったのは、おそらく周首相が、自民党内に強い親台派があり、その抵抗を避けえないということと、大平外相の意を受けた古井喜実、田川誠一両者の覚書貿易代表団が中国側との交渉を進めていたことによるものであったろう。

古井、田川両者は、田中訪中のさいの交渉のポイントとなる戦争状態の終結、『復交三原則』の扱いなどで周恩来首相と詰めた話合いを行うことができた。戦争状態の終結については、日本側は日華平和条約で中国

との戦争状態は終わっているとしたのに対し、中国側は国交正常化で終結すると主張した。また「復交三原則」の扱いについては、ほぼストレートな形での盛込みを主張する中国側と、三原則をバラバラにして共同声明や他の方法で表明することを主張する日本側とが対立し、すべては田中訪中のさいの首脳会談で決着をつけることになった。

かくて、田中政権発足以来二カ月あまりの超スピードで、田中訪中の地ならしはほぼ整った。九月二十一日、日中両国政府は、「田中首相は周首相の招きを喜びをもつて受け入れ、日中国交正常化について交渉し、解決するため、九月二十五日から三十日まで中国を訪問する」との同時発表を行い、ここに田中首相、大平外相の訪中が確定したのである。

日中交渉は意外なスピードで進んで行ったが、これに反対する勢力の動きも、日を追って高まって行った。とくに大平の自宅には脅迫状まがいのものが頻々と投げ込まれるようになり、周辺のものが大平の身の危険を案じるほどであった。

ちょうどその頃、大平に親しいある記者が、山形二区の衆議院補欠選挙に立候補した黒金泰美を応援する大平外相に同行したが、大平は、列車が福島を出て間もなく、板谷峠にさしかかると、急に真顔になり、「キミと旅をするのもこれが最後かもしれぬ。ボクは（反対勢力に）いつ殺されるかわからないのだ。もし天がボクを助けて下さるなら、この交渉は成功するだろう」と言って、移り行く窓外の山々の景色に目を向けたという。

事実、大平は、この訪中決意をした直後に、なぜこつした決断を下したかの真意を綴った遺書を認めたという。

大平は羽田を立つとき、秘書の一人を呼んで、「万が一、この交渉が不調に終わった場合には、自分としては日本に二度と帰ることができないかもしれない。またこの交渉によってどんな危険があるかもしれない。

留守中のことはよろしく頼む」と語ったという。

国運をかけた大問題に取り組み政治家は誰しもそうであろうが、大平もまた、この交渉に生命を賭けていたのである。

田中首相、大平外相、二階堂官房長官らに乗せた日航特別機は、九月二十五日朝、羽田を出発し、午前十一時三十分（日本時間午後零時三十分）、秋晴れの北京空港に着陸した。空港には周恩来首相が迎え、田中首相、大平外相と握手を交わし、両国歌が吹奏された。北京では交渉と歓迎行事が並行して行われた。

到着したその日から始まった交渉は、主として田中首相、大平外相と周恩来首相との間で行われ、細部の詰めを必要とする点は大平外相と姬鵬飛外相が話し合った。田中首相は釣魚台国賓館で漢詩をつくるなど、くつろいだ様子だったが、側近が首相の意向を聞くと、「大平君がやっているから大丈夫だ。まとまらなければ何日間でも滞在をのばす。妥結しなければ帰らない」と明言した。

しかし、交渉は冒頭から難航した。大平外相と姬鵬飛外相との第一回会談では、高島益郎外務省条約局長が日本側の正常化に対する基本的な考えを詳しく説明した。その内容の報告を受けた周首相は田中首相、大平外相に「よもや高島局長の話が、田中、大平両首脳の真意を伝えているとは思わぬが、あれではケンカを売りにきたのが正常化にきたのかわからない」と外交巧者のこの人らしく強い態度を示した。田中首相、大平外相が「それじゃ中国側の見解はどうなのか」と問い返すと、周首相らは逐条的に原則論のような考え方を述べた。会談後、二階堂官房長官が「両国首脳は驚くべき率直さで討議を行った」と説明したのは、こうした雰囲気を目指したのである。

正常化にあたっての懸案事項については、東京での大平外相と中国要人の接触、与野党議員を通じての非公式折衝で、お互いにある程度の感触はわかっていたものの、さていざ交渉となると思いもかけない点が問

題となつてくる。交渉の合間に大平外相は「伏兵があつて困るな。こっちが予想もしていなかったことが、急に問題になつてくるのだから……」とこぼした。

ポイントになつたのは、やはり日本が台湾の国民政府との間に結んだ日華平和条約だった。日中間の戦争状態を終結し賠償問題に決着をつけた点として改めてどう扱うか、台湾に対する領有権を主張する中国側とその領有権を放棄した日本の立場をどう表現するか、長い間経済面などで交流の深い日台実務関係をどのような形でつづけていくことができるか など、すべて台湾にかかわる問題ばかりであつた。

中国側が問題視したものとしては、このほかに、一日目の夜の田中首相のあいさつがあつた。このあいさつは、中国側が田中首相、大平外相ら日本側代表団を人民大会堂に招いて開いた歓迎宴の席上、周首相が「一八九四年から半世紀にわたる日本軍国主義の中国侵略によつて中国人民は極めてひどい災難をこうむり、日本人民も大きな損害を受けた」と述べたのに対し、田中首相が「わが国が中国国民に多大のご迷惑をおかけしたことに ついて、改めて深い反省の念を表明する」と述べたくだりである。中国側は、この問題についてもっと深い陳謝の表明があるものと期待していたが、「ご迷惑」という軽い表現で扱われたことに強い不満の態度を示したのである。

交渉での中国側の出方は強硬であつた。一日目で交渉は早くもブツドロックにつきあつた形となつた。大平外相は国賓館で待つていた田中首相に対し、「おい、どうする……、これじゃ帰れんなあ」と話しかけた。首相は、「こういう時になると大学出のインテリはダメだなあ」と答え、「じゃ、どうしたらいいんだ」という問いには、「そこを大学出のキミたちインテリがチエを出さなきゃ」とハツパをかけて、大笑いとなつたという。首相はまた同時に、「ここまできてそれほど譲歩する必要はない。よくよくダメなら帰ればいい。觀光にきたと思えばいいさ。あとのことは俺が責任を持つ。もう一ぺんねばつてやつてくれ」と大平外相らを励ました。

二日目の夜から、交渉は周首相にかわって姫外相が相手となった。中国側の要望で大平外相が日本案を一条ごとにゆっくり説明すると、姫外相はそれを丹念にメモにとった。そのメモは一条が終わることに中国側の秘書らしい人物が部屋から持ち出し、別室に運ぶ。全部の説明が終わって二十分ほどたつて中国側にまた別室からメモが届き、姫外相は中国側の見解を述べる。このような形で会議が続いた。別室には周首相がいて日本案を検討していたと言われる。この頃中国では江青など「四人組」の勢力が強く、周首相はむずかしい立場にあった。そこで周首相はできるだけ交渉の前面に出ないで別室で陣取り、毛沢東主席に大スジを報告するとともに、中国共産党内部の調整をはかりながら、事実上、交渉の指揮にあたっていたのである。

三日目は、中国側が用意した万里長城と明の十三陵の見学であった。大平外相と姫外相は往復四時間の間、同じ車の中で事実上の交渉を行った。長城では、すたすた登る田中首相とは違って、大平外相の足取りは重く、口数も少なかった。「昔、この八達嶺を通って張家口に行ったものだ。夜汽車が多かったな」というのが長城でもらした一言だったが、大平外相の脳裡は当面する問題でいっぱいだった。

ついで交渉は、大平外相と周恩来首相との間の膝詰め談判となった。日華平和条約で謳われている戦争状態の終結を日本と中国との間で改めてどう表現するかについては、周首相が知恵を出した。つまり「両国間にこれまで存在していた不正常な状態に終止符を打つ」という表現である。さらに台湾の領有権問題については共同声明に中国側の主張を盛り、日本側は「中国の立場を十分理解、尊重する」との意向を表現することで落着した。日台間の経済、文化など実務関係を民間レベルで継続していくことは、共同声明では一切ふれないものの、中国側が暗に認めるとの意向を示した。ただ一点、日台間の外交関係をいつどのような方法で断絶するのが、最後まで残る問題であった。

三日目の夜、中国側は突然、毛沢東主席が田中首相、大平外相と会談することを伝えてきた。大平外相は即座に二階堂官房長官を加えるよう中国側に求め、中国側もこれを受け入れた。中南海の毛沢東の私邸で行

われた会談は一時間にわたった。冒頭、毛主席は「もうケンカはすみましたが。ケンカをしなければ仲良しにならない」と話しかけ、「ケンカはすんだ」という表現で、日中交渉はおおむねまとまったのだろうという意思表示をした。付箋のついた本に埋まるような書齋で、小さな葉巻をふかしながら、毛主席は田中、大平、二階堂に話しかけ、同席の廖承志中日友好協会会長を指さして、「彼は日本生まれなので、帰るときぜひ連れて帰ってください」などと冗談をとばした。ただ、問題となった田中発言については、「若い人たちが、ご迷惑をかけたという表現は不十分だといってきかない。中国では女性のスカートに水をかけた時に使う言葉だから……」とクギをさしたという。

田中首相、大平外相らと毛主席との会談で、交渉は事実上ヤマを越した。残された日台外交関係の扱いは、日本側が独自に「台湾との外交関係の終了」を表明することとなったが、周首相は執拗に「それをいつ発表してくれるか。時期を明示してくれ」と迫った。大平外相は「外交問題というのは、絶対間違いないと確信していても期日を明示してしまうと、万が一にも一時間でも一日でもおくと両国の信頼関係にひびが入る。信用してまかせてほしい」と答えた。周首相も「大平さんを信用しよう」ということで決着がついた。

四日目の首脳会談が終わるさい、周首相は毛筆で「言必信行必果」（言必ず信あり、行い必ず果す）と認めた色紙を日本側に渡した。これは「論語」の子路編で、子貢が「士」とはどういう人物かを聞いたのに対して孔子がこたえた三つの条件の一つであり、周首相がどれほど大平への大きな期待を抱いていたかが推察できる。

調印の日を前にしたこの日の共同声明の作成作業は、大平・姫の間で進められ、姫外相が一条ことにメモを作って隣室に待つ周恩来の手許に届け、それがメモをつけてかえされるといって二日目のやり方がとられた。最も難航したのは、田中首相が一日目の夜に「中国人民に多大の迷惑をかけた」と述べた文句をどう表現するかという問題であったが、大平が知恵を出して、「責任を痛感し、深く反省する」ということで妥結したと

きは、すでに午前四時半であった。

五日目の九月二十九日、『北京秋天』の表現通り晴れ渡った空の下、人民大会堂東大庁の間で調印式が行われた。両国の国旗が飾られたテーブルに、田中首相と大平外相、周首相と姬外相がならんで坐った。カメラのフラッシュをあびながらあいさつを交わした両国首脳は、それぞれ硯箱から毛筆をとりあげ、共同声明に署名、正本を交換して何度も何度も握手を交わした。

調印式のあと、プレスセンターとなつている民族文化宮のホールで大平外相の記者会見が行われた。大平は、「日中の不正常な関係に終止符が打たれたことは、アジアひいては世界の平和に重要な貢献をするものである」と述べたあと、いきなり日台外交関係にふれ、「日中関係正常化の結果として、日華平和条約はその存在意義を失い、同条約は終了したと認められるというのが日本政府の見解である」とキツパリ表明した。周首相が何度も「いつ明示してくれるか」と迫っていたこの問題について、大平外相は共同声明を出したその日に断行したのである。周首相はこの一連の交渉の間に大平の物事への処し方や態度に触れ、その人物を高く評価し、側近に対して「(大平は)誠実で嘘を言わない、言葉遣いはあまりうまくないが、内秀で博学である。誠心誠意田中を補佐し、大平あつての田中であり、大平あつての中日国交回復である」と述べた。

宿舎の国賓館に戻った田中、大平、二階堂の三首脳は改めて祝杯をあげ、お互いの労をねぎらった。田中首相は大平外相に「本当にご苦労さん。これからも協力してやって行こう」と声をかけた。大平外相は次のような感懐を詩に託し、毛筆で認めて二階堂官房長官に贈った。

長城延々六千里 汲尽蒼生苦汗泉

始皇堅信城內泰 不知抵抗在民心

山容城壁默不語 榮枯盛衰凡如夢



日中交渉が妥結して田中首相はただちに帰国する意向を示した。早目に帰国して党内に報告し、調整を急ごうというのである。だが、北京訪問のうちに上海を訪問する日程はすでに決められていた。中国側は、当時勢威を誇っていた張春橋ら四人組の拠点である上海の訪問を中止されては大変だと、日本側に対して懸命の説得工作を行い、周首相みずからが小型機に同乗して、上海に向かうことになった。小型機が出発しようとしたとき、廖承志がタラップの下に近づき大声で、「田中さん、大平さん、身辺に十分気をつけてください」と呼びかけた。中国側は決死の覚悟で訪中した田中・大平両首脳の心情を読みとっていたのである。また、中国側は、日中正常化に反対する国内の一部分子の動きを阻止するため、極秘に二個師団を動員し、国賓館などの警護にあたっていたと言われる。

田中首相と大平外相は周恩来首相と向かい合って座っていたが、やがて田中首相は大きないびきをかきながら眠ってしまった。大平外相は周首相の話の相手をしながら、田中の方を気にしていたが、上海到着が近くまで起きなかった。

上海錦江ホテルの歓迎宴では田中首相も大平外相も杯を重ねた。日頃酒を飲めない大平外相もテーブルをまわる間に十数杯のマオタイ酒をあげ、めずらしく酔って、ホテルに帰りつくくなりベッドに倒れこんで寝てしまった。

翌九月三十日、田中首相、大平外相らは上海から帰途についた。空港には周首相をはじめ中国首脳が姿をみせ、民族衣装の子供たちも「歓送、歓送、日本貴賓」と歌いながら踊って見送った。

日中国交正常化は、明治開国後の近代化過程で、日本が惹起した中国侵略の過去を清算し、日中間に新たな信頼関係を確立するとともに、アジアに平和の基盤を築くための真に歴史的な事業であった。それはまた、損なわれた人命、加えられた経済的損失に対して全く賠償を請求することなく、日本との外交関係を回復した台湾政府を否認し新しい政府を承認するという点で、内外ともに大きな問題を抱えた難事業であった。さ

らにそれは、それまでの対米追隨外交から自主独立外交への転換という険しい選択でもあった。

のちに大平は、日中国交正常化や共同声明ができ上がる過程を振り返って、「その時は無我夢中であったが、よくもこの険路を乗り切ることができたものだ」と述懐するとともに、「サンフランシスコ平和条約の締結に比肩するこの重大な外交案件が平穩裡に処理されたことを喜ぶ」と述べている。戦前中国で働き、中国について知悉していただけに、中国問題について一貫して慎重な姿勢を示してきた大平が、台湾との外交関係断絶という思い切った挙に出てまで、日中国交回復を事実上自己の責任で成し遂げたことは、その政治的生涯にとって極めて重要な意味を持つこととなった。彼はここで、真の政治指導者への大きな飛躍を成し遂げたのではなかっただろうか。